

批判的实在論とリトロダクション

—社会科学方法論の比較から—

木田 融男ⁱ

社会科学の方法をめぐる論議において、新しく理論展開を行っている批判的实在論（CR論）とマルクス理論との関連性を、まずは「CR論とマルクス理論との結婚：幸せ、不幸せ、それとも破局？（Happy, unhappy or on the rocks?）」（Brown et al. (eds.) “*Critical realism and Marxism*” Routledge, 2002）という論文から紹介する。その中からとりわけ、CR論におけるリトロダクションとよばれる方法をめぐって、マルクスの『資本論』における方法（MMC）との「不一致」に関する論議を検討する。結論として私の見解は、CR論におけるリトロダクションの有効性は認め、両方法は「不一致」であるという見解については不同意を示した上で、逆に「MMCこそがリトロダクションである」という見解をとり、さらにはその論証を試みたい。

キーワード：リトロダクション、实在的ドメイン、超事実的、構造、（生成、因果）メカニズム、線型的運動－循環的運動

はじめに

社会科学の方法をめぐる、イギリスを中心に新しい理論展開を志向している批判的实在論（Critical Realism 以下 CR論）とマルクス理論¹⁾とは重なる部分が多いのであるが、しかし興味深いことにマルクス理論の基本的な CR論理解については「多様な」見解がある。本稿ではまずはマルクス理論からの CR論理解の分布を紹介したうえで、とりわけ CR論のリトロダクション（以下 RD）とよばれる方法をめぐる「相違」にしぼって、その論議を検討したい。私の見解は、CR論における RDの有効性を承認した上で、「RDとマルクスにおける資本論の方法」とは異なる、という見解については不承認

を示したうえで、逆に「資本論の方法こそがリトロダクションである」という見解をとり、さらにはその論証を試みてみたい。

1. 批判的实在論とマルクス理論

ブラウンらマルクス理論研究者による書（Brown et al. (eds.) “*Critical Realism and Marxism*”）には、興味深い章が掲載されている。本書の編集者三名の「リレー式論文」とでも言える「1章 CR論とマルクス理論との結婚」（ibid. §1）と題されるもので、副題が「幸せ、不幸せ、それとも破局？（Happy, unhappy or on the rocks?）」とされており、この副題通りに内容は、次にみる両理論のそれぞれの関連を示す立場から三名の編集者が執筆するというスタイルがとられている。すなわち、①マルクス理論は、CR論から奪われることなしに何かを得ることがで

i 立命館大学産業社会学部教授

きる：フリーウッド担当，②マルクス理論は，CR論から何も助けられて得るものはない：ロバーツ担当，③マルクス理論とCR論は，相互に何かを得ることができる：ブラウン担当，という三つの立場であるが (ibid. p.2f.) 以下それぞれの節をみていこう。

(1) フリーウッド：批判的实在論はマルクス理論を成熟させる

ランカスター大学の雇用研究所にいるフリーウッドによると、「マルクス主義」とは、哲学、理論、政治実践の三つを併せた思想であるが、それに対しCR論とは主として哲学を柱とした思考である。したがって (三名共同執筆の) 本章におけるCR論とマルクス理論との比較検討においては、両者の共通領域として哲学、とりわけ科学哲学 (そしてそれと関連する範囲での (社会) 理論) ということとなる (ibid. §1-§§1 p.2)。

さて、フリーウッドの両者の関連についての立場は上記三つの中では①であるが、彼は自らもマルクス理論家として現代イギリスにおける実証主義、ポストモダン論、ポスト構造論にたいする批判を行っているが、同時に従来のマルクス理論の科学哲学に対しても厳しい態度をとっている。それは、イギリス科学哲学界でのマルクス理論批判への対応やトピックへの理論的追究の拙さ、そして科学哲学における包括的・体系的刊行などにおける遅れを指摘するのである。そこで彼はマルクス理論の科学哲学に「成熟する (full-blown)」ことを求めるのだが、そこに欠けている科学哲学の「成熟化」を助けるのがCR論だと論じて①の立場を主張する (ibid. §1-§§1 pp.3-4)。

本節でフリーウッドが具体的にマルクス理論の「概念的曖昧さ」を論究するのは、従来の「法則」に対するCR論の「傾向性」についてであり、とりわけ『資本論』3巻にある「利潤率低下法則」²⁾について詳しく検討する。CR論の理論的特徴の一つは、実証主義が提示する「法則」(例えばヒュームの法則) に対する批判であり、社会的事象がもつ開放シ

ステムの性格からくる因果性を「傾向性」としてとらえることであろう。この考えは同時に従来のマルクス理論の「法則」の使い方にも「曖昧さ」の指摘となる。そして本節でフリーウッドは、「利潤率低下」については「法則」ではなく「傾向性」としてとらえ、「傾向性」の性格づけとしてそれが「構造において生成する力」を、「保持された力」／「行使された力」／「現実化された力」に分けた上で、行使される前の「保持された力」でもなく、行使された結果としての「現実化された力」でもなく、「行使された力」が「傾向性を生成させる力」なのでであると提起している (ibid. §1-§§1 pp.4-5)。

またフリーウッドは、同書の4章の個人論文ではマルクス理論の「労働価値説」についてCR論の視点を入れた考察を行っている (ibid. §4) が、次のロバーツからは批判をされている。

(2) ロバーツ：マルクス理論は、批判的实在論から何も助けられるものはない

マンチェスター大学の社会学部にいるロバーツは上記の②の立場であるが、CR論に対しては、その「深さのドメイン、因果性、(構造の) 力」などの論点についてはマルクス理論として深く考えさせられたこと、またマルクス理論も「偶然的レベル」の存在への考察が必要であるという見解には同意することをあげて評価する。しかし①の立場であるフリーウッドに対しては、同じ1章のなかで率直な批判を行う (ibid. §1-§§2 p.8)。

まずはフリーウッドが述べる科学哲学における「CR論の助けによるマルクス理論の成熟化」の提起について、ロバーツは次のように考える。それは、マルクス理論における科学哲学の制度的確立を言うのであれば、フリーウッドのように、マルクス理論の蓄積の外側から (すなわち批判的实在論の助けによって) 発展に向かう前に、マルクス理論の蓄積そのものの考察 (すなわち史的唯物論や政治経済学批判である『資本論』のアウトライン) から始めて、発展を考えるべきではないのかというものだ (ibid.

§1-§§2 p.9)。

さらにCR論の問題点については、マルクス理論と共有しうる「哲学的遺産」の再検討により両論を比較するという作業をロバーツは行うが、CR論へのカントの影響を指摘し、具体的にはリトロダクション(Retroduction, 以下RD)をめぐる論議でその問題点を浮き彫りにしようとする。そしてヘーゲルを発展させたマルクスの『資本論』の方法から、CR論およびRDを批判しつつ両理論的方法的相違を明示化しようとするが(*ibid.* §1-§§2 p.14f.), 次章以降で詳しく考察していきたい。

またロバーツは、同書の12章で「自由論」「開放論」を「二つの弁証法」(すなわちマルクス理論とバスキアの弁証法的CR論, Bhaskar 1993, 式部訳, 2015)から考察しているが(*ibid.* §12), RDにかかわる箇所については次章以降で考察する。

(3) ブラウン：マルクス理論と批判的实在論は、相互に何かを得るものがある

上記③の立場で3節を担当したリーズ大学で経済学を教えるブラウンは、マルクス理論はCR論から学ぶ必要があるとし、先の二名の見解についてはフリーウッドの提起を承認する。そしてマルクス理論が学ぶ内容として、「構造的因果性、創発性、傾向性、思考と対象の区別」などの考えをあげるが前二つの考えについて深化すべきとした。具体的にはポスト構造論、ポストモダン論、社会構築論への批判のためにも、实在論的世界の探究をする科学哲学およびその方法論を教習する必要を説く(*ibid.* §1-§§3 p.17)。ただ、①の立場をとるフリーウッドとの違いとして、マルクス理論はCR論によって「成熟させられる」のではなく、CR論を受け止めそれを超越しうるマルクス理論となるべきであるとし、なぜかというCR論が扱う対象を探究する哲学が複数あってもよい、すなわち両者が一つになってしまう必要はないからだとする(*ibid.* §1-§§3 pp.19-20)。

なおブラウンは同書の9章で、ロシアのマルクス理論哲学者イレンコフのスピノザ研究から、バスカ

ーらがCR論で扱っている「心の独立性」問題の探究を進捗させていった過程をレビューしている(*ibid.* §9)。

(4) クリーヴァン：『マルクス理論と实在論』から

リーズ首都大学で社会学を教えるクリーヴァンは本章の7章を執筆しており(*ibid.* §7), 『マルクス理論と实在論』(Creaven 2000)を既に著しているが、その副題「社会科学における实在論の唯物論的アプローチ」にみるように、上記三つの立場に対して、さらに四つめの④の立場、すなわち「实在論が、マルクス理論の助けを必要としている」という見解であると思われる。彼自身の著書における見解は「創発論的マルクス理論」あるいは「創発論的社会学」と語っているもので、「無機物的物体から、心、身体、社会までの諸階層に広がる世界を扱う」として、实在論的社会理論的方法論的課題は「構造的体系的に形成された社会的世界における弁証法的な相互行為の研究」であるが、「創発論的マルクス理論」はこれを受け止めるのに対して、实在論的社会理論も「古典的マルクス理論の要請にコミット」していくべきだとする。实在論が応えるべきマルクス理論の要請とは、「人間エージェンシーの特定の形態」としての「社会的労働と階級闘争」および「社会体系の構成やダイナミズムの形成」における説明の要としての「社会構造、すなわち生産力と生産関係」であるとする(*ibid.* introduction)。

彼はバスキアの「心」(Bhaskar 1979, 式部訳 2006), またアーチャーの「人格、エージェンツ、行為者」(Archer 1995, 佐藤訳 2007)に呼応して「主体、行為、エージェンツ」などの「創発論的マルクス理論」³⁾の展開を著書で表しているが(*ibid.*), ただ先のフリーウッドは直接クリーヴァンへの批判ではないが、マルクス理論家たちの实在論的理論化に対応したこういった人間、人格、行為等の研究に関連する「新たな」試みは、ともすれば「個別的」でしかなく、また古典の「再解釈」にすぎないという風な厳しい評価も下している(Brown, et.al. (eds.),

op.ct. §1-§§1 p.3)。

2. ロバーツによる批判的実在論とリトロダクション批判

(1) ロバーツによるリトロダクション理解

ロバーツによれば、CR論は、なによりも「超越論的社会理論」(ibid. §1-§§2 p.12)としてカントから強い影響を受けているとする。経験主義にたいしてカントが理性(reason)によって世界を批判的に把握する思考を、バスキアーは遺産として継承してCR論において科学の発展を経た上で、現象の根底に存在する「生成メカニズム(generative mechanism)」を同定化することにより現象を説明するという方法を発展させた(ibid. p.12f.)。この提起こそ実在のより深い側面の探究を可能とすることにより、カント理論の「殻を破った」とアーチャーらは評価している(ibid. p.13), とする。しかしカント哲学から遺産の「批判的」継承をしたCR論は、カントの残渣(residues)をも保持してしまったとロバーツは指摘し、リトロダクション(retroduction, 以下RD, 式部訳では遡行的推論法とされている)をめぐる論議でその問題点を浮き彫りにしようとする。そしてさらにはヘーゲルの遺産からその哲学を「転倒」させつつも継承したマルクス理論の方法を、具体的にはマルクスの『資本論』の方法を共通の土俵として、CR論におけるRDとの方法論上の比較などを行っている(ibid. p.14f.)。結論を先に記せば、ロバーツは、RDは線型的運動の方法であるとして、循環的運動であるマルクスの「資本論の方法(Marx's Method in Capital, 以下MMC)」ではないと批判するのであるが、以下で私見も加えて検討考察していきたい。

(2) バスキアーのリトロダクション

リトロダクション(以下, RD)とは、演繹法、帰納法、アブダクション(abduction, 仮説発見的推論法)に並ぶ推論の四番目の科学手法である(Danermark et.al. §4, 佐藤監訳 p.145f. 『社会を説

明する』は、以下『説明』⁴⁾)。とりわけRDは、「経験的ドメイン(後述)」のみを前二者による推論で解明する経験主義に対して、その現象の根底に存在する実在性の領域を、現象の生成メカニズム(あるいは構造(structure), 関係性(relation), 因果力(casual power))として解明しようとする推論形式である(Bhaskar 1979 p.12f., 式部訳 p.13f., Danermark et.al. ibid. §4, 『説明』4章)。

1) 科学の三局面

バスキアーは、『自然主義の可能性—現代社会科学批判—』(『The Possibility of Naturalism』)の著で、「科学的発見」について述べ、そのなかでRDという推論形式を紹介している(Bhaskar 1979 p.12f. 式部訳 p.13f.)。ここでは科学的発見には二つの条件が必要とされ、一つは、自存的(intransitive, 式部訳は自動的)次元において、発見される何らかの事物が発見という行為そのものとは無関係に存在していること、もう一つは、意存的(transitive, 式部訳は他動的)次元において、発見される事物はその発見に至るまで知られていないこと、であるとされる(ibid. p.11, 同書 p.13)。そして「科学の三局面(three-phase schema)」として、①現象(phenomenon)を同定し(identify, 式部訳は現認し)、②現象について説明(explanation)を構築し(construct, 式部訳は打ち立て)、③説明の可否を検証(empirically test, 式部訳は経験的にテスト)する、という「弁証法発展(continuing dialectic)」の過程を定式化しているが(ibid. p.12, 同書 p.14)、ここで「説明」とは、科学がその確証を得るための中心とされ、科学の目的とは現象の生成メカニズムに関する知識を説明のために生み出すことだとされる(ibid. p.12, 同書 p.14)。また説明のためには、認知的素材(cognitive material)の利用や加工に基づくモデルづくりが必要なのであるが、ここでのモデル(model)とは、「あるメカニズムが特定の仮想的な状態で存立作用していると想定することによって、問題となる現象の仕組みを明らかにする手法」とされ(ibid. p.12, 同書, p.13)、この推論形式が本稿で検討していく

RDなのである。

2) リトロダクション

さて、バスカーは「科学の三局面」を記した上で、続けて科学が「この三局面を経て現象の深部で作用している生成メカニズムへの同定へと至り」、さらに「今度は」⁵⁾、その同定された「生成メカニズムが説明される現象となり、繰り返していく」⁶⁾ (ibid. p.12, 同書, p.14) とある。また続く表現では「この展開過程において、实在性 (reality) のより深いレベルもしくは層が次第に解明されていくのに応じて、科学は認知的資源や物質的道具を自在に使うとその説明を構築し (construct), 検証し (test) なければならない (ibid. p.12, 同書, p.14)」ともしている (訳は必要な所は筆者)。ここまでのバスカーの表現には、「科学の三局面」に出てくる「説明」と、現象の「深部」あるいは实在性の「より深いレベル」での「説明」とが見られ、いずれもRDにかかわるのであるが、次のような二つの特性をもつRDを相対的に分岐できるのではないと思われる。

3) 二つのリトロダクション

A リトロダクションⅠ：一つ目は、科学の三局面の②に見られる同定した現象の「説明」におけるリトロダクション (以下 RDⅠ) である。ただし、ここで現象の説明に使われる推論は思考あるいはモデル構築をとまないつつも、その現象とはCR論的には「出来事 (event, 『説明』の訳, 事象とも訳す)」であり、経験できる領域の「経験的ドメイン (empirical domain)」もしくは、そのドメインを含む経験できないが生成している「現実的ドメイン (actual domain, 『説明』の訳ではアクチュアルなドメイン)」であり、これらのドメインは事実的な (factual) 対象であろう。そしてその現象の説明については、主としては「超事實的 (trans-factual)」な上記ドメインを生成させている「实在的ドメイン (real domain)」において行われる (『説明』2章)。ここで「超事實的」という含意は、知覚できる出来事である事実としての「経験的ドメイン」でも、あるいは知覚できないが出来事である事実としての

「現実的ドメイン」でもない、それら出来事である事実の背後にあって、事実を構成し生成している「实在的ドメイン」のことである。説明の検証については、その説明が具体的な出来事をどれだけ理解しうるものであるかを示すことであるから、自然科学であれ社会科学であれ、科学の三番目の局面である説明の検証は、基本的には可能だと考え得るのである⁷⁾。

またこの①から③までの科学の三局面については1展開とは限らず、バスカーが語っているように、ある説明が構築されたら次には2展開目として、その説明自身が、①'次の新たな「現象」として同定され、②'次の新たな「説明」が構築され、③'次の新たな説明の「検証」となり、さらにまた次々とバスカーがいう「弁証法的展開」がなされていくのである (ibid. p.12, 同書, p.14)⁸⁾。

そして説明には次のような区分があろう。すなわち後に紹介するセイヤーが明示化しているが、彼は实在的ドメインを「構造」と「メカニズム」とに分岐させており (Sayer Figure8 (Structure, mechanisms and events) p.117), したがって、a 構造による説明 (Sayer p.96f., 『説明』では「構造分析」p.71f.), と、b メカニズムによる説明 (Sayer p.103f., 『説明』では「因果分析」p.82f.) があることとなる。そしてそれぞれは实在的ドメインであるので「超事實的なもの」であろう。そこでRDⅠにおける主要な説明は、实在的ドメインを構成する構造／関係に対する、aの「構造分析」が主となるだろうし、絶えず科学の三局面における「事實的」な具体的なものによる検証は可能であると考え得る。逆にいえば次のリトロダクション (RDⅡ) の説明は、实在のより「深部」における (生成, 因果) メカニズムに対する、bの「因果分析」が主になると考えられるのである⁹⁾。

B リトロダクションⅡ：そして二つ目は、上記の科学の三局面を経た現象の「深部で」作用する「メカニズム」の同定としてのリトロダクション (以下 RDⅡ) であろう。すなわち (経験的あるいは現実的ドメインにある) 出来事を生成させる实在的

ドメインの構成であり、超事実的な対象であり思考あるいは認知的素材を使用したモデル構築に大きく頼らざるを得ない推論である。そして実在的ドメインにおける超事実的な何ものかを構成することとは、それは経験的あるいは現実的ドメインという存在ではない何ものであるから、例え狭い意味での「経験的手法」による実証だけではないとしても、バスカーが述べている「経験的なテスト empirically test」]としての検証作業としては、少なくとも社会科学においては極めて困難であるか不可能な作業だと言えよう（自然的世界の対象ならば、実験の場を通じて閉鎖システムを人工的に作成でき検証は可能であるが、社会的世界の対象は開放システムであり実験設定も無理であるので¹⁰⁾、超事実的な実在的ドメインの存在については同定や検証は困難か不可能である¹¹⁾）。したがって厳密に言うならば科学の三局面の内において行う前者のRD Iとは、あい異なる方法を要する実在的ドメインにおける推論ということとなるのである。そしてここでの同定の目的は、超事実的な実在的ドメインにおける（生成、因果）メカニズムなのであり、上記区分のbの因果分析としての説明が主として必要とされるのである。

さらに付け加えておこなうならば、このRD IIで導きだされた説明＝メカニズムが、さらに今度は新たに「説明されるべき」対象として、より「深い」レヴェルや層で作用する「新たな説明＝新たなメカニズム」を目ざしてやはり「弁証法的に展開」していくことが語られているが（ibid. p.12, 同書, p.14）、ここで示されているRD IIの「深化」とは、バスカーは科学の認知的資源や物質的道具の進展に関わる発展としているので、説明＝メカニズムの解明には、RD II的な場合は、長い歴史的（通時的）発展を要するという点でもあろう。

さて以上の違いによるRD IとRD IIとを、例えばマルクスの『資本論』の方法（以下、MMC）と比較考察するならば、下向－上向法と称される抽象化－具体化との関連や、それとの関連におけるRDの性格付けなどの問題を、更に検討しなければならない

だろうが、その前にマルクス理論に精通しつつCR論をも深く研究するセイヤーのRDへの視点について見ておきたい。

(3) セイヤーのリトロダクション

1) 抽象－具体

ロバーツも引用しているセイヤーの『社会科学の方法－実在論的アプローチ』（“*Method in Social Science –A Realist Approach–*”）の著を参考にしつつ、バスカーのRDを抽象－具体の考え方をに入れて考察したい。セイヤーはまずは、RDとは「抽象化の方法」とする（Robarts §1-§2 p.13, Sayer p.86f.）。そしてこの抽象化とは、対象がもつ必然的で内在的な特性を隔離する（isolate 分離して取り出す）こととされる。ここで取り出された特性としての抽象とは、バスカーが言う説明のために構築されたモデルなものであるが、セイヤーによればこの特性が同定されたなら、これら特性がもつ多様で偶然的に結合しあっている諸規定を検証できるようになるとされる（これはバスカーの「科学の三局面」の③にあたる）。その検証とはセイヤーによれば具体化の過程であり、対象について確実に理解しうることになったとされ、前段の抽象化と後段の具体化を、具体→抽象、抽象→具体の運動なのだと提示している（Roberts ibid. p.13, Sayer p.87）。さらには、思考を通じてモデルが既存の認知的素材を用いて構築されるのであるが、このモデルにより「抽象化が遂行される」とも述べている。

セイヤーの特徴は、バスカーの科学の三局面およびRDの方法を、抽象－具体の視点から捉えていることである。しかしRDの方法すなわちセイヤーの表現では、対象が持つ「必然的／内在的な特性」すなわち実在的ドメインの抽象化すなわち隔離（isolate）の方法については、バスカーの「三局面」の①から②の局面、つまり現象を同定し、その現象の説明を構築する局面にあっている。そして説明における超事実的な実在的ドメインについては、彼の表現では「因果メカニズム」がその内実とされて

いる。したがって前述したRD Iにおける、a実在的ドメインにおける構造分析による説明、b実在的ドメインにおけるメカニズムの因果分析による説明のうちでは、bがセイヤーのRDの目的となっている。したがって具体的な対象の現象を同定した上で、対象である現象の生成を説明するメカニズム（セイヤーの言では因果メカニズム）を抽象化、すなわち隔離して構築していることとなる。

2) 超事実的な実在的ドメイン

そして次のバスカーの③の局面＝説明の検証については、因果的メカニズム（あるいはその所産）の特性がもつ多様で偶然的／外在的な結合である諸規定を検証するのであるが、ここを具体化の過程としている。この過程が具体→抽象、抽象→具体の過程なのではあるが、ただしかし微妙なセイヤーの次の表現が入るのである。すなわち「本来は超事実的なドメインにある因果的メカニズムの所産が、この時にのみ同定できる」(Sayer p.13)と。なぜ微妙かというと、本来は因果的メカニズムとは超事実的なものであるから、具体的で経験的な検証は不可能である。にもかかわらず、超事実的な因果メカニズムについて、その所産は「この時でなくとも常に」検証は可能であるのに、超事実的なもの（因果メカニズム）が、「この時にのみ」なぜ検証が可能なのかについては、それ以上は語られてはいない。したがってセイヤーの特徴である抽象－具体が、果たしてバスカーの「科学の三局面」さらにはRDの方法に対応するのかについては少し齟齬が見受けられるのである。しかしながら、バスカーのRDとの対応関係についてならば、RD Iがセイヤーの具体－抽象によるRDと同様の展開と言えるのであるが、超事実的な因果メカニズム（バスカーでは生成メカニズム）の同定というバスカーのRD IIとも、同定の目的においては同様と言えるのである。

しかしながら、もう一方のバスカーのRD IIである「三局面」の過程を経た後にさらなる「深部」へと導かれた結果において獲得される方法については、セイヤーは語っていない。すなわち、抽象－具体

という過程から、より「深部」である超事実的な実在的ドメイン（因果メカニズム）へと進むRDの方法（RD II）については、セイヤーによっては提示されていないと思われるのである。ただし、因果メカニズムは、認知的素材を用いて構築されたモデルによる獲得については提示しているが、科学の三局面（抽象－具体）を経た後の「深部へ」と導かれた結果ではなく、モデルによる「抽象化の遂行」の結果であるとのみ語られているのである。

けれどもセイヤーが語った「微妙な」箇所は、いみじくもRDの方法における「微妙な揺れ」を垣間見せているともいえるのである。すなわちまずは、バスカーが定式化している科学の三局面の現象の同定－説明の構築－説明の検証の過程は、基本的には超事実的な実在的ドメインではない事実的な現実的ドメインからの推論が主であり、セイヤーはその過程を具体の抽象化（説明の構築）－抽象の具体化（説明の検証）における推論としているのである。そこから次には、科学の三局面の過程で説明のために認知的素材等を使用しモデルにより構築される因果メカニズム（超事実的な実在的ドメイン）があるのだが、それが生成する「所産」（出来事としての事実的な経験的／現実的ドメイン）の同定（具体化）だけではなく、この抽象化されたモデルを具体化していく過程の「瞬間にのみ、」超事実的なものが同定できると語っているのである。セイヤーはバスカーと違って、抽象－具体の過程は関連しあう相互作用として捉えられているので、あくまで事実的なもの（それは検証に関わる）と超事実的なものとは相即関連にあるのだが、科学の三局面から超越してより「深部に」至る実在的ドメインである「超事実的なもの」それ自体を抽象化する方法は提示していないように思えるのである。

(4) リトロダクションのIとII

見てきたようにRDをあえて種別化するとすれば、一方では科学の三局面における②の局面である説明のモデルによる構築において抽象化の過程で分離さ

れる超事実的な実在的ドメインの獲得であり(構造あるいは関係に対する構造分析)、科学の三局面における③である事実的な具体的諸規定によって、説明が検証される過程を合わせた、RD I といえる推論がある。この方法は、具体と抽象との相即連関は見られるのであるが、しかし具体としての現象を抽象化して隔離して取り出される抽象は、必ずしも現象の説明に資する実在的ドメインであるとは限らないだろう。現象としての具体を説明しうる抽象すなわち説明しうる実在的ドメインを、「思考」において超事実に「飛躍」した抽象化で構築せねばならない場合もあると思えるし、とりわけ現象を生成させているメカニズムを析出するにはRD IIのような方法も用いなければならないと思えるのである。したがってもう一方では科学の三局面を経てさらに進められるより「深部に」おけるモデルにより構築される超事実的な実在的ドメインを獲得する過程であり(メカニズムに対する因果分析)、社会的世界では「経験的なテスト」である検証は不可能とされるRD II といえる推論の二つがあることとなる。

ダナマークらによる『社会を説明する』(以下『説明』)では、バスカー、セイヤーをふまえて実在論における抽象-具体が語られている箇所がある(『説明』3章)。そこでの抽象化とは、基本的には「具体的なものを隔離(isolation)すること」とあり、抽象化して隔離されたものとは具体的な出来事の「本質(essential)、あるいは本性(nature)」である構造/関係、(生成、因果)メカニズムとしての実在的ドメインであり、この抽象化がRDにおける重要な作業であることは言うまでもない。ただしその「特定の側面」を分離する仕方は、一方では「出来事操作」によるものと、他方では「思考」によるものとの二つがあるとされ、『説明』ではRDの方法は後者であると語られる(『説明』p.69)。したがって、前者の「出来事操作」による分離がRD I であり、後者の「思考」による分離がRD II であると考えやすいが、当然ながらそれは正確な対応ではない。ここにおける前者すなわち出来事操作による抽象化とは、

事実的な現実的ドメインにおける具体的なものの抽象化のことであり、後者すなわち思考における抽象化とは、超事実的な実在的ドメインにおける現実的ドメイン(具体的なもの)からの超越としての抽象化のことである。上記のRDのIとIIにおいて、思考(あるいは思考の所産であり手段としてのモデル形成)が両方法ともに必要であることは既に確認している。問題は、出来事操作との関係であるが、RD I は出来事操作と思考があたかも具体化→抽象化、抽象化←具体化の相互作用における相即の作業となっており、同定あるいは検証が可能なのに対し、RD II は、出来事操作から相対的に超越した思考による抽象化においてなされるのであり、そこでの同定や検証は成立し難いというところに相違があるということなのである。

3. ロバーツのリトロダクション批判

(1) 『資本論』の方法

さて次には、マルクスの『資本論』における方法(以下、MMC)であるが、ロバーツによればそれは哲学の遺産としてヘーゲル思想を取り入れ、さらにそのヘーゲル弁証法を「転倒」させるなかで出てきた手法であるとされる。ヘーゲルは「対象の本質は意識に現象する」とし、例え部分的であっても主観的な知(カテゴリーなど)は対象の客観的世界を反映していると考え。ゆえにそういった不十分な本質を把握した知であったとしても徐々に複雑なものへと進化し、当初の知を捉える地点に回帰した時には、当初は見えなかったより本質的な関係を理解しうる「新しい知」となっていく弁証法的な過程が示されるのである(Brown et.al. op.cit. §1-§§2 p.14)。この考えを資本制社会という現実社会の分析に取り入れたのがマルクス『資本論』の方法(以下MMC)である。それは「下向/上向」法とか言われるが、目の前の複雑で具体的な「人口」(社会関係)から抽象化(前進(progression)、下向(forward))し、最も単純で抽象的な「商品」へと到達し、今度は複

雑な諸規定に構成された「人口」へと再び具体化(後退 (retrogression), 下向 (backward))した時, それは「体系的で全体性としての社会関係」へと発展しているが, ロバーツはそれを上記の RD が「線型的運動 (linear movement)」であるのに対して「循環的運動 (circular movement)」と呼び, 資本主義がもつ体系的で全体的なダイナミズムを把握した方法とする (ibid. p.15, Arthur 1998)。

(2) リトロダクション批判

ロバーツの問題指摘によると, CR 論における RD は「カントの残滓」を引きずっており, それは根底にある実在的ドメインすなわち生成メカニズムを如何に把握するかに係るといふ。CR 論は RD で抽象的なものを把握するために, 思考 (thought) が必要だと強調するが, それは既存の認知的資源やモデルを駆使して, 複雑な具体から単純な抽象 (すなわち生成メカニズム) を隔離して取り出す思考による過程であり, この抽象は具体 (現象) を説明するためのものとなる。隔離された抽象は, 具体において検証され, それによる説明の妥当性を確認するために複雑な具体へと進むのだが, ロバーツはこういった RD による方法を, 思考により形成された抽象から具体へと一方向的に進む線型的運動だと指摘する (ibid. p.15)。それはしかし, 抽象が具体とは内在的／必然的な関係を持ちえない, 「単純さと複雑さ (抽象と具体, 筆者) とが固定された対立の」関係 (ibid. p.15, Shamsavari, 1991) となってしまうしており, 結局は生成メカニズムを把握し得ていないと論じると同時に, 後に見る MMC (それは循環的運動の方法だとされる) とは, RD は方法論的に異なっていると断ずるのである。

以上, CR 論のバズカー, セイヤー, 『説明』などを検討してきたが, それらをふまえてロバーツの「線型的」と称される RD の方法への批判について考察していきたい。

(3) ロバーツのリトロダクション批判への考察

ロバーツは結論として, MMC は循環的運動の方法として, 対するに RD は線型的運動の方法であり MMC とは異なる社会科学の方法だと批判している。私の見解としては, MMC が循環的運動の方法であり, 線型的運動の方法にたいする批判の妥当性は認めるものの, RD は線型的運動の方法であり MMC とは異なるという, ロバーツの批判については賛同できない。すなわち, MMC は循環的運動の方法であるとともに, RD もそうであると (さらには MMCこそ RD なのではないかと) 私は考えるからである。したがって, 本章では RD (私見では RD I と RD II とに分岐するが) と MMC とを比較し, MMC を RD で捉えることによって, 両者は重なる方法であることを提示したい。

1) リトロダクション I と『資本論』の方法

RD I の科学の三局面における①と②は, 現象 (具体) を抽象化して「説明」(抽象) に到達したのであるから MMC の下向にあたり, ③は「説明」(抽象) を具体において検証 (経験的にテスト) していくのであるから上向にあたりと考えられる。バズカーの科学の三局面や, セイヤーの具体→抽象 (すなわち下向), 抽象→具体 (すなわち上向) とは, MMC を念頭に作成されていると考えられるので, RD I と MMC とは共通の方法であり, したがって概念における抽象-具体という意味での循環的運動も, 両方法には相違はないと考える。

さて次に比較する上での検討課題は, RD I の科学の三局面における②の「説明」が, 前述の a か b の「超事実的な実在的ドメイン」から構築すること, MMC との対応関連であろう。ロバーツはカントの「残滓」として CR 論における思考の「強調」を問題にするが, 別に CR 論でなくとも抽象化には思考は必要とされているのであり, したがって RD I の基本が抽象-具体の相互作用すなわち「弁証法的な展開 (バズカー)」の末に, 思考 (あるいはモデル形成) による抽象化によって説明概念を構築することは, MMC にも存在する研究方法なのではないか

考える。例えば商品は、資本や貨幣というより具体的なものの隔離 (isolation) により取り出された、より抽象的なものでありまた資本や貨幣を「説明」するに必須となる概念である。その説明とは、前述の a 構造分析、あるいは b メカニズムに対する因果分析という超事実的な実在的ドメインなのかについては、後の MMC における商品概念の詳しい検討で考える問題ではあるが、少なくとも a にかかわる貨幣や資本を構成する構造の性格を保有していることは言えそうであろう。さらには商品からより抽象化された価値は、この概念なくしては商品や貨幣や資本の構成を説明できないのであるから、少なくとも a の構造分析に係る概念であることは言えるであろう。したがってまずは RD I と MMC とを比較する限り、少なくとも「資本論の方法は RD ではない」というロバーツの判断を簡単には承認できないのである。

2) リトロダクション II と『資本論』の方法

では RD II と MMC についてはどうだろうか。まずは、具体と抽象との関連 (あるいは循環的運動と線型的運動との関連) についてであるが、RD II とは、科学の三局面の展開を経た上で、さらに「深部に」において主として思考 (あるいはモデル形成) によって、「超事実的な実在的ドメイン」とりわけ「(生成, 因果) メカニズム」を説明のために構築する方法である。もちろんのことそれまでの科学の三局面において十分に具体→抽象, 抽象→具体 (循環的運動) を行ってきたのであるから、ロバーツが批判するように「思考」により構築された抽象モデルが、具体にたいして「一方向的=線型的」に適用されたものとは言えないだろう。しかしカントの「残滓」とロバーツが言う「強調された思考」が、行き過ぎれば「抽象と具体との固定された対立」という場が登場するという点をどう考慮すれば良いのだろうか? セイヤーはこの問題を、前述で示したような「本来は超事実的なドメインにある因果的メカニズムの所産が、この時にのみ同定できる」という微妙な表現で、抽象と具体との「対立の一時的解

消」を計ろうとしている¹²⁾。果たして RD II において、この解消が現れるものなのだろうかについて疑問はなお残る。言えるとすれば RD II は科学の三局面に依拠する RD I と切り離されないで、如何に説明を構築するかという点に係っているだろう。またバスターは、別の形で抽象と具体との対立の「解決」を提示している。それは科学の認知的資源や物質的道具の発展による、超事実的で実在的なドメインにおける生成メカニズムの認識の深化を語って「実在性のより深いレベルもしくは層が次第に解明される」と述べており、研究手段の発展において、具体と抽象の対立への新たな「解決」が行われることを示唆しているのである¹³⁾。

さて、では逆に MMC においてはこの RD II にかかわる部分は何なるものと言えるのであり、今見てきた問題については保有しないのだろうか。それを検討するには、そもそも MMC の中に「超事実的な実在的ドメイン」における「(生成, 因果) メカニズム」に対応する方法なり概念とはどのようなものなのかを考えておかねならないだろう。例えば MMC に良く出される「法則 (law)」(価値法則等) は RD II と対応するのだろうか。まずは法則概念をめぐるでは CR 論では「開放システム」の社会的世界においては「傾向性 (tendency)」として捉える見方があり、この問題は別途に基本的な考察を要するであろう。私見としては書物の「思考しうる理論上」(すなわち「閉鎖システム」) では、法則の成立は考え得るとするが、「開放システムでは『純粹』な法則は存在し得ない」という点においては、CR 論に同意したい。けれども更なる考察を要するので MMC のメカニズムとは何かという当面の問いからは「法則」については外しておこう (Brown et.al. (eds.) op.ct. §1-§§1)。次にロバーツが前述論文で批判を行ったマルクス理論家で CR 論者であるフリーウッドの、MMC における三つのドメインを具体的に列挙している点についてはどうだろうか。当論文によれば (ibid. §4 p.78), 経験的ドメインは「商品と貨幣の交換」、現実的ドメインは「微小な幾

多の生産単位への労働活動の編成化」,そして実在的ドメインは「物質的-技術的と社会-経済的な関係;私的所有,疎外された労働,国家等々」としている。とりわけ実在的ドメインすなわちメカニズムが,「私的所有,疎外された労働,国家」といった所与の既得の概念として示され,今まで見てきたRD IやMMCにおける具体の抽象化(下向)により獲得された概念ではない。それこそロバーツの批判する一方向的な線型的運動の方法に通ずる概念でしかないので,ここでRD IIの実在的ドメインにおけるメカニズム概念としては採用できないだろう。本稿では,次に見るMMCにおける現代のイギリスでのMMC研究者アーサーによる見方(Arthur 1997)と,日本における弁証法哲学の研究者であった見田石介の見方(見田 1963)を取りたいと思う。アーサーは,ロバーツの言う循環的運動の方法としての抽象-具体の認識論としての循環的運動に加えて,対象としての資本制社会(あるいはその生産様式)における存在論としての循環的運動(商品→……→商品)の提示等をしており,見田はMMCを分析-総合と弁証法的総合の二つの視点から捉え,前者を分析して析出された概念が構成されていく「単純な総合」(私見ではRD Iの構造分析に対応)に対して,後者を対象としての社会的世界における歴史的生成を捉える方法と概念(私見ではRD IIの因果分析に対応)と見て,後者を生成概念としてそれが成立する「条件」を提示している考え方であり,それぞれMMCにおけるRD IIで考察される実在的ドメインにおけるメカニズム(生成メカニズム,因果メカニズム)だと考えるのであるが,次章後半でより詳しく検討し考察したい。そしてこの両者の考え方は,逆にマルクス理論あるいはMMCからCR論あるいはRDに,「足らざるを補う」方法的視点なのではないか,とも思うのである。

4. リトロダクションによる『資本論』の方法の考察

前章まではCR論のRDについてRD IとRD IIとに区分した上で,MMCとの比較を行い,私の結論としてはロバーツが言う「RDはMMCではない」という見解に対して,抽象-具体あるいは線型的運動-循環的運動の関連では,RD I = MMCであり,RD IIは近似的にはMMCの循環的運動を持つが,場合によれば線型的運動に陥ることがあり,したがってRD II \approx MMCというものであった。そこで今度はMMCについて,CR論とりわけRDに係わる方法的課題について検討を行いたい。

(1) 『資本論』の方法と二つの循環的運動

まずはMMCが循環的運動だと称されるのは,ロバーツについては,具体→抽象,抽象→具体という分析-総合の認識論における循環であり,そのところはバスターも(彼は「弁証法的展開」と言明している),セイヤーも変わらないところであろう。しかし,MMCを考察する研究には,MMCの基本となる概念(これはCR論では実在的ドメインにおける概念)について,対象(社会あるいは資本)そのものが持つ存在論としての循環的運動を語るアーサーの提起がある。例えばArthur 'Against the Logical-Historical Method' (Monthly and Campbell (eds.) "New Investigations of Marx's Method" Humanities Press, 1997)によれば,彼はロバーツが線型的運動であるとCR論批判に使用した視角をMMC研究の「論理=歴史的方法」に当たるものとし,それに抗する弁証法的方法として,MMCにおける循環的運動を対置するなかで,対象がもつ循環的特性を提示している。

アーサーによれば,まずはMMCの商品とは資本主義における「特定の歴史概念」であるとし,線型的運動だとする論理=歴史の論者たちの商品概念が「非歴史(歴史貫通)的で一般的な抽象概念」¹⁴⁾であ

る性格を批判し、もしも歴史的に存在するとするならばどの歴史にも散在的に見られる「小土地所有者の生産した商品」を単に表現する概念でしかないとする (Arthur p.12f.)。そこで検討されているのは商品概念の性格づけなのであるが、歴史的特定性か非歴史的一般性か、あるいは循環的運動か線型的運動かについての問題は、CR論におけるRDの方法論にも係るのであるからさらに検討を行いたい。

(2) 『資本論』の方法における概念

1) 線型的運動の概念

まずは、一方向的な線型的運動とされる非歴史的で一般的な概念について見ておきたい。

MMCを線型的に捉える考え方には、モンスリーの編集による“*Marx's Method in Capital*” (Monseley, 1993)の序文で、三つのタイプが紹介されている。一つは、本稿で検討している「論理＝歴史 (logical-historical)」方法であり、他には「連続接近 (successive approximation)」方法や「線型生産 (linear production)」方法などが紹介されている (ibid. p.1f.)。さて論理＝歴史的方法とは、かつて日本でも論議されていたのであるが、MMCの方法である具体 (人口：社会)を抽象化 (下向)して辿りついた具体化 (上向)の出発点ともなる商品概念の性格づけに係る見解の内の一つである。商品概念はCR理論のRDによっても「超事実的な実在的ドメインにおける生成メカニズム」とも言えそうな特性を持っているが、留意すべき理論課題を検討しておきたい。さて論理＝歴史的方法では当該商品を歴史貫通的な一般的な抽象概念として、歴史的な資本制社会における具体的な商品としては捉えない考え方を言う。したがって厳密には具体としての社会あるいはそこにおける資本を抽象化して導出された概念としても見ないとも言えるのであるから、この商品の具体としての歴史的な姿態としては「前資本制的な (あるいは小土地所有者による) 単純商品生産」における生産物とする見方を取るのである。そこから『資本論』における叙述の出発点として、まだ具体

的な諸規定を纏っていないまさしく「思考」による抽象化において考えだされた「商品」概念を最初にもって来ることにより、そこから一方向的に現在の資本あるいは資本制社会へと論理的な展開をもつ叙述に進む方法なのである。そして具体的な歴史においては「前資本制的な単純商品生産」が現在の資本制における商品あるいは貨幣、資本へと進んできた歴史的道程に対応するのだと論じる方法であるから、論理＝歴史的方法と呼称されるのである。

先に紹介したMMCを循環的運動として捉えるアーサーや、CR論のRDを線型的運動として批判しているロバーツからは、この論理＝歴史的方法は、「思考」のみによる抽象化された商品概念が線型的な形態で、現在の資本制社会の商品、貨幣、資本等をあつかう具体－抽象の循環的運動をふまえない具体性から乖離した一方向的な方法であるとし、ロバーツはさらにバスター等の方法も同じ徹を踏んでいると批判しているのである。

私はRD (RD IとRD II)も、具体－抽象の相互作用をふまえた循環的運動を扱っており、MMCもその方法という意味では両方法は異なるものではないという見解を持つものであり、前述したようにCR論のRD IIにおいては場合によって、超事実的な実在的ドメインにおける思考による抽象化が、具体との関連の仕方に相即でない場合が在り得るという留保を除けば、基本としてRDの方法は循環的運動であり、思考によってのみ抽象化された一般的な抽象概念を一方向的に具体化していく線型の方法ではないと考えているので、そういった視点からMMCを考察するものである。

2) 『資本論』の方法へのアーサーの考え方

前述の課題に係る必要な考察は、MMC (あるいはRD)における循環論を取る場合、その出発点 (すなわち「循環的運動をしている概念の連鎖の何処か切断点」)は、商品であるとしても当概念は論理＝歴史的方法論者が述べるような非歴史 (歴史貫通)的、一般的な抽象概念ではなく、歴史的、特定の対象に連結する抽象概念としての商品であること

を理論的に説明することであり、さらには当概念が実在的ドメインの生成メカニズム、すなわち資本を必然的に発生させる概念であるか否かの考察であろう。

まずはアーサーの論述から見て行こう。彼は丹念に『資本論』の出発点を検討し、例えば様々な出発点を比較考慮しながら立論していくのであるが、そこから出発点の一つは「価値」と考える見方、もう一つは「産業資本」と考える見方を検討しておこう (ibid. p.23f.)。一つ目の価値は商品をさらに分析抽象化した概念であり、「価値形態」として商品－貨幣－資本に係るのであるから、資本制社会の downward (抽象化) の最後の概念であり、RD からするなら「説明」概念としても、また貨幣や資本への生成メカニズムとして超事実的な実在的ドメインにおける概念としても適切であるかのように見える。アーサーの紹介では例えばバナジ (ibid. p.26, Banaji 1979) などは、「二つの出発点」として商品と価値の双方が『資本論』の出発概念と述べている程である。アーサーは出発点に必要な性格として、単純な抽象化された概念と同時に無媒介的 (直接的) 概念であることをあげ、価値は商品や貨幣や資本の媒介概念でありそれ自体で存立する概念でないことを出発点として扱えない理由としている (Arthur ibid. p.26f.)。しかし価値の概念を、実在的ドメインとして扱うべき性格をもった概念 (商品を構成する構造／関係) として考え、さらに価値の概念を RD II として商品や資本を生成させるメカニズムとも考え得るが、しかしそのためには後述するように、商品や資本と同じように、「何らかの条件」を必要とするのである。

もう一つは「産業資本あるいはその生産」を出発とする見方についてであるが、アーサーの興味深い記述によれば「システム (= 資本制) における最も重要な契機は産業資本であり、……これがシステムの再生産を駆動する (ibid. p.32)」とあり、この見方は必要であるとしながらもしかしそれは外在的 (偶然的) な要因としての性格を帯び、生産を内在化 (必然化) する循環によって媒介されるがゆえに出

発点たりえないとするのである (循環として見るならば商品がやはり適切な概念となる ibid. p.32)。この産業資本概念は資本制社会 (あるいは生産様式) の生成を示す RD II にあたるメカニズムにあたることも考えられようが、先の価値あるいは商品と同様、それが RD II としての生成メカニズムを確定する概念とするには、やはり「何らかの条件」が与えられなければ同定できないと考える。

ここまで種々の候補となる出発点の概念を消去する考察を行った上で、アーサーは商品概念こそ MCM の出発点であると結論づけ、もちろんのこと当概念は特定の資本制的歴史において抽象化された概念であり、思考のみから一方的的にモデル化された超歴史的な概念とは見ないのである。そして抽象→具体、具体→抽象としての循環的運動、および資本制の生成に係るメカニズム (商品－貨幣－資本－生産／労働－剰余価値－商品'……) に基本として係る循環的運動 (商品→……→商品'……) を語りうる概念でもあろうとする (ibid.)。

ただし、ここでやっと考察できるようになったのであるが、「商品」概念がもつ二つの性格である「資本制の要素 (細胞) としての商品」と、「資本制を創発するものとしての商品」とを、また上記の循環に係る「商品－貨幣 (－資本) －商品'……」という過程における前者の商品と後者の商品'との関連を、著述の出発点においてどういった位置づけを与えるのかという問題であり、つまるところ商品は線型的運動なのか循環的運動に係る概念なのかについて後者を正しいとする根拠づけが必要となるのである。アーサーの持論である資本制の「全体性」という視点から商品を見れば、その概念的出発点としても、資本制から生成してきた歴史的特定の性格を持つという論議も、商品の前提概念として「資本制という全体性」を指定することのみでは、決定的な根拠づけにはならないであろう。

しからば資本を生みだす商品が、資本により生みだされるという循環的運動の出発点として指定されるのを、アーサーは「最初では前提をもつ商品」と

表現し、「完全として在らねばならないことが前提された」性格づけを付与し、「最も初歩的で前提をもたない様式で定義」される商品と描写し、価値形態という（弁証法的）発展を通して、商品とは実在的には（really）何であり、なぜ前提のない所から出発せねばならないかを、私たちは理解できると論述している（ibid. p.31）。したがって『資本論』の出発点として、商品は妥当性を持っており、しかもその二重の性格までは理解できるのではあるが、とりわけ資本へと生成し循環を構成する「生成メカニズム」となる契機＝「何らかの条件」については判然としなないものが残るのである。

3) 『資本論』の方法への見田の考え方

マルクス理論哲学者でヘーゲル弁証法研究者である見田石介は今から半世紀以上も前に『資本論の研究』（見田 1963）などで、日本で既に MMC の研究を深めていたが、上記で論議されている「商品」を巡る研究課題等への彼の見解を見てみよう。彼はロバーツやアーサーと同じく、循環的運動の視点から「商品」に対しては歴史的な特定の概念とする立場から研究を進めている。上向－下向については、彼が常に言うのは「事実からの出発」であり、「頭のかなからのカテゴリーの創造」ではなく、「対象そのもの、事態そのもの、……現象する姿、与えられた事実」から「合理的な推理」で抽象する、すなわち「本質的なものを分離し……明確にその形態を規定し」て、そして対象を「概念に変える」手順を示し、そのためには弁証法とともに「分析と総合」という当たり前の科学の方法も重視するとしたのである（見田 1963 p.13f.¹⁵⁾。そして抽象－具体（見田では分析－総合）における方法的な循環的運動については、その運動の中で絶えず具体的な事実と言う「表象を思いうかべる」ことの必要性を指摘している。

そして当時の日本において論理＝歴史的方法の立場で MMC 研究をしていた経済学の宇野弘蔵が論敵であったが、宇野の手法もまた線型的運動であると見田は批判した（見田 1968）。宇野の方法は、「一般理論」として「永遠に繰り返される『純粹』資本

主義」というまさしくモデル（見田はウエーバー的な「理念型」であると批判する）を MMC から導ける原理として展開して行くのであるが、この手法こそロバーツが CR 論に対して批判を展開した線型的運動の典型であり、一般的な抽象モデルの具体的な現実への一方向的適用と称せるであろう。また宇野の『資本論』における「商品」とは、資本概念が登場するまでは「非歴史的で一般的な抽象概念」として扱い、先述した現代イギリスでの論理＝歴史的方法論者と同じく、それは前資本制社会において存在した商品（すなわち小土地所有者の生産した商品）と同じもので資本制における特定の歴史性を帯びた概念ではあり得ないとするのである（見田 1968 p.8f.）。

対する見田は、商品と資本は「相互前提概念」であるとし、そこに概念的な一方向的でない循環的運動を見るのである。例えば「……はじめの概念（『資本論』の出発点としての商品）は、一つの想定の上で立ったもので、次の概念（資本の生産による商品）に到達してはじめて完全な概念になる……」と規定し、出発点である商品は「いわば論理的な借りをもった概念」であるとも論述している。そして商品と資本との関係については、商品は資本の前提であるが、一般的には「たんに歴史的前提にすぎず、商品は資本に発展するのではない」と位置づけている（見田 1968 p.180）。しかしながら、「何らかの条件」の時にのみ商品は資本へと移行する必然性をもつのだとしてもおり、その「何らかの条件」とは価値においても、資本においてもその概念を「生成メカニズムにさせる現実的条件」と私は考えるのであるが、本稿の最後に見田の「何らかの条件」についての提示を検討するが、ここでは商品の捉え方が CR 論とりわけ RD の見方にとっては、一方では歴史的で具体的な概念として「事實的」な概念であるが、他方では非歴史的で抽象的な「超事實的な実在的ドメイン」に係る概念としての特性も持っていることを確認しておこう。

さらにはアーサーが検討した価値概念および資本

概念について、見田の捉え方を確認しておこう。まず価値概念、あるいは使用価値、交換価値などの概念については、商品概念を分析的に抽象化した歴史的に規定されない、非歴史的で一般的な抽象概念であり、したがって「商品へと移行する必然性をもたない（見田 1963 p.64）」概念といえ、商品はそれらが「単純な総合過程（同書）」により成立する概念であるとする。したがってこれら価値概念は非歴史的な抽象概念、すなわち「超事実的な実在的ドメイン」に係る概念と言えよう。そして資本概念についても見田は、一方では資本を前提としないために、非歴史的な抽象概念としての商品は、そのままでは他方の資本へと移行する歴史的な具体概念となる必然的な前提をもつ概念とはならないとするのである。したがって、価値も商品も資本も RD I における「超事実的な実在的ドメイン（非歴史的一般的な抽象概念）」としてはそれぞれがそれぞれの前提あるいは構成要素となりうる「構造／関係」としては成立するものの、「生成メカニズム」としてはつまり RD II の概念となるには、「何らかの条件」を必要とするということなのである。

(3) 『資本論』の方法とリトロダクション

以上、MMC における価値、商品、資本の概念を、アーサーと見田の見方により検討したのであるが、そこで語られている見解が CR 論そして RD と方法論上で重なるものなのかどうかをさらに考察して行きたい。

1) リトロダクション I との関連

『資本論』は元々、バスキアの「科学的方法」そしてセイヤーの抽象－具体（循環的運動）に取り入れられたと想起されるのであるが、さらに具体的に検討していこう。「人口（現前の社会関係）」が商品まで下向（抽象化）され、その商品が出発点となり貨幣、資本……と上向（具体化）されるのであるが、その場合の出発点は商品が設定されているのは前述してきた。しかしその商品は、価値へと抽象化され、価値は抽象的労働へと抽象化されている。もちろん

絶えず出発点の商品を表象に浮かべながら、価値や抽象的労働が語られるのであるが、ここで出現するより抽象化された価値や抽象的労働の概念は、非歴史的な一般的な抽象概念（すなわち超事実的な実在的ドメイン）であり、それ自身が生成メカニズムというよりは商品という半ば生成メカニズムの特性をもつ商品を構成する要素である構造／関係として考えられよう。したがって価値や抽象的労働は、商品を「説明」する概念的な構成要素であり、それら抜きには商品を措定することはできない。これはバスキアの科学の三局面で見れば、「現象の同定」における商品（あるいはその構成）を、「説明」する価値あるいは抽象的労働の概念があり、それらの各要素が具体化（上向）の過程でより構造化（あるいは関係づけ）られることにより検証されつつ、より具体的な商品に到達するということであろう（見田の言い方では「分析された概念の単純な総合過程」、見田 1963 p.114f.）。しかし価値の概念は、商品の構成を説明する超事実的な構造／関係という実在的ドメインとしての存在ではあっても、商品を生成するメカニズムとしての特性はまだもっておらず、そこで構成された商品も、まだ「半ば」非歴史的で一般的な抽象概念（超事実的な実在的ドメインの）でしかない。

したがって価値概念は一般的な抽象概念であるがゆえに『資本論』の出発点とはなれないが、商品の概念的確定がなされた後、後述する「何らかの条件」の下、貨幣、資本を価値形態として媒介的な形態ではあるが（アーサー、前述）、RD II の生成メカニズムとして「必然的な発生過程の生成」（「弁証法的な総合過程」、見田 1963 p.58）に係っていくのである¹⁵⁾。

そして価値概念により構成された商品概念が、『資本論』の出発点になる概念的位置をもったのであるが、RD I という意味では、商品概念こそ、資本制における歴史的な特定の概念であるという意味で「事実的」な存在という特性と、価値により構成され、さらにはより具体化される貨幣、資本を説明す

る構造／関係として、さらにはそれらを生成させるメカニズムでもある「超事實的」な存在という特性を併せ持つ、抽象－具体（下向－上向）あるいは科学の三局面が同定した概念と言えるのであろう。そしてこの資本への移行を必然として保有する商品こそ、資本を生成するメカニズム（実在的ドメイン）なのである。ただし、この商品も次に見る「何らかの条件」の下でないならば、その移行（歴史的な生成）は達せられないのであり、単なる一般的な抽象概念としての商品に留まるのである。

また資本は、アーサーによっても、見田によっても、資本制社会（あるいは資本制的生産様式）の生成メカニズム（必然的な発生過程の生成）なのであるが、この概念も一般的な抽象概念としての価値、商品、貨幣を構成要素として単純に総合する特性である限りでは、すなわち RD I の結果である構造／関係に留まる限りは、RD II のメカニズムの生成過程には至らないのである。

2) リトロダクションⅡとの関連

では、MMC にあって、下向－上向（抽象－具体）の過程、すなわち CR 論の科学の三局面を超えてさらに「深部へ」と進む RD II については如何なるものなのだろうか。ここで把握される実在的ドメインである（生成、因果）メカニズムこそ、資本制社会全体（あるいは資本制的生産様式）の生成あるいは形態転換（再生産と移行）に係るものなのであるが、RD I の過程における価値、商品、資本の概念は実在的ドメインではあっても、RD II の生成メカニズム（必然的な発生過程の生成）の特性を有するには、見田はどのような「何らかの条件」を把握しているのであろうか。

見田は価値、商品、資本の概念が、単なる一般的な抽象概念に留まり、その上向（具体化）が「単純な総合過程」でしかない特性から、概念が必然的な移行の特性を有する「何らかの条件」として次のようなものをあげている（見田 1963 p.57）。

商品流通の全面的な発展、社会的生産力の一定の発展、二重の意味での自由な労働力の存在という条

件であり（同書 pp.94-97, pp.108-111）、その条件下で、資本を含蓄しない、あるいは資本へ必然的に移行しない商品から、資本制的生産のための「条件」すなわち、「資本はその発展のために、商品流通を強力に普及し、全面化して、自分の前提（商品）を自分で定立し、自分の脚でたたねばならない」条件が、商品の資本への移行を必然化する、という視点を示している（同書 pp.108-109）。この時『資本論』の出発点としての役割を商品は確保するのであるが、同時に RD I の過程における商品から RD II の生成メカニズムを保有する商品へと特性を変えるのではあるが、資本制社会（あるいは資本制的生産様式）の生成のメカニズムとはならない。それは同じ「条件」が資本の生成メカニズムへの変化を確保するが、さらなる「条件」が資本（あるいは産業資本とその生産）を社会全体（あるいは資本制的生産様式）への移行を司る生成メカニズム、すなわち全体的な RD II の特性を獲得する変化（見田によれば弁証法的な総合過程）を示すのである。ここに出現する資本は、それが資本制的生産（生産過程、生産関係＝階級関係へと発展）における「剰余価値の生産という特性が賃労働者の剰余労働によって与えられる」過程として定置された時、資本制の商品生産社会という具体的な歴史的特性をもつ社会関係を生成する出発点となるのである。いいかえれば「剰余価値の生産という特性が賃労働者の剰余労働によって与えられる」ことと規定し（同書 p.94）、そのための「条件」とは、商品が資本への移行を必然化した「条件」と基本としては同じものを含むものとして、「商品流通の存在およびその全面的発展」と同時に、「産業資本あるいはその生産、そしてその過程で生産される商品に内在する剰余価値を生成する条件」こそそれであるとして、「二重の意味での自由な労働者の存在、すなわち賃労働の存在」としての「自分の労働力の売り手」が市場に登場することは前述したが、さらにその背景となる「条件」として「社会的生産力の発展、封建制度の解体」とい

う「一つの世界史的包括」を提示しているのである（同書 p.95f.）。

今や明らかにされたこれら条件化で、MMC は RD II の第一歩を示したといえるのであり、同時に商品から出発した『資本論』は剰余価値を含む商品の新たな段階における資本の生成を語るなのであるが、これが循環的運動と語られた方法であり、商品概念の「借りられていた前提」は本物の前提となり、CR 論でいえば「剰余価値」という超事実的な実在的ドメインを含蓄する資本（産業資本）とその生産が、RD II により導かれた実在的ドメインにおける（生成、因果）メカニズムであるともいえるのである。

また CR 論の RD におけるメカニズムの確定における抽象－具体の問題、あるいは「思考」の問題等がまだ方法論的に未解明なところは多いのではあるが、少なくとも見田が語る「資本論の方法」で示された、非歴史的で一般的な抽象概念（すなわち超事実的な実在的ドメインの RD I）が、商品から資本へ、そして社会関係（あるいは生産様式）へと必然的な移行（すなわち RD II としての生成メカニズム）を獲得するには、資本制という「世界史的包括」というような実在的な歴史的過程を絶えず念頭に「表象し」立ち返る研究態度が必要であるということなのであろう。

おわりに：今後の検討課題

しかし『資本論』は、三巻の「階級」¹⁶⁾の章で終わっている。したがって資本制的生産様式の一步についての RD II は行いうるかも知れないが、残念ながら「……実在的（現実的）で具体的な……多くの諸規定と諸関係の豊かな全体性としての（体系的な：ロバーツ）人口（社会関係：ロバーツ Brown et.al. (eds.) §1-§§2 pp.13-4）」への上向（具体化）による到達は成されていない。それが完成した MMC 全過程から、果たして RD I そして RD II が見出せるのかは、今後問われなければならぬ課題（あるいは社会科学そして社会学の課題¹⁷⁾）なのではある

が、今ある未完の『資本論』における MMC から CR 論あるいは RD との重なりが引きだせるのかという確定の後にくる課題なのである。

そして MMC を CR 論あるいは RD と対置させながら、新たな研究の展開可能性を期してきたのであるが、MMC で残された「階級」の章出現以降の大きな検討点としては、人間の問題すなわち階級としての「エージェント」として、そして本来の「人格」をもつ人間として、さらには社会的役割を担う「行為者」として（以上、人間に存在する「階層」の視点はアーチャーの視点である。Archer 1995, 佐藤 2007）考察せねばならず、とりわけそういった人間のまさしく RD による同定（例えばバスターは「心」の解明まで至る「共時的創発力に基づく唯物論」の方法と提起している。Bhaskar 1979 §3-§§4, 式部 2006 3章4節）が、大きく浮かび上がってくるのであるが、それはまた今後の重要な課題であらう。

注

- 1) 本論では、「実在論」(Realism) に対する Marxism を「マルクス理論」と訳す。
- 2) マルクスの『資本論』での使い方は「利潤率の傾向的低下」という風に、「法則」というよりは「傾向性」という含意であらうが、従来のマルクス理論には「法則」概念は確かに存在するので、CR 論の提起に対する現今の私見については、簡単に後述するが今後の検討課題とする。
- 3) マルクス理論の従来説、例えば土台と上部構造の定式化も、「創発論的上部構造」という概念となるが、そうすれば従来の土台の基底性を主とした上部構造の「相対的自律性」という考え方とは幾分異なる意味合いをもつこととなりさらなる考察を要する。また、「主体、行為、エージェント」は従来のマルクス理論ではどう位置づけられてきたのか、(社会) 構造との関連については「分析的二元論」なのかあるいは「一元論」で捉えるのか、などなどまさしく CR 論と真正面から向き合う必要のある重要な課題である。
- 4) 当書は私も翻訳に参加させていただいたが、

CR論の主要な用語(訳語)については本書に依っている。著者のうちダナマークとカールソンら両氏は産業社会学部でのシンポジウムに、スウェーデンから報告討議に来日されたが、その時の報告ペーパーが当特集に掲載されている。

- 5) この箇所の原文はそのまま訳すと、「(三局面を経て)作用している(at work)生成メカニズムの同定へと至り(leading to)……」となり、式部訳の「現象の深部で」という表現はバスカーには見られない。ただし、その後「この展開過程において、実在性のより深い(deeper)レベル(levels)もしくは層(strata)が次第に解明されていく……」とあるので、以降「深部で」とか「より深い」という表現を使用している。
- また now が、式部訳では「今度は」「(次は)」という意味か?)とされているが、ロバーツのバスカー同書の英文引用では then となっており(Brown et.al. §1-§§2 p.13)、「その時に」とか「ここでは」という意味であろう。「科学の三局面」の「次は」なのか、「その時に」なのかが原文でも訳でも明確ではない。
- 6) 式部訳では「……そのメカニズム自体を起点にして、それを説明し検証するための新たな弁証法が展開されるのである)」としている。生成メカニズムが「説明されるべき現象(=対象)」(the phenomenon to be explained)となることが訳では明示されていない。また次のバスカーの表現は、……and so on. であり、「説明し検証する」とか「新たな弁証法」という表現はバスカーにはない。したがって、ここの表現が「科学の三局面」の「中の」過程なのか、「科学の三局面」の「後の」過程なのか明確ではない。私は、本稿では「科学の三局面」の過程と、「科学の三局面」の「後の、より深部の」過程とを相対的に分けて考えている。
- 7) シンポジウムでは、報告者の一人カールソン氏は自然科学のように「実験」できない社会科学では、バスカーが「科学の三局面」の③で言う「説明(超事実的な実在的ドメイン)」の「検証(経験的テスト)」が「不可能」とであると発言されていた。私は、「科学の三局面」の過程での RD I では、少なくとも「検証」は不可能ではないと考える。これが不可能だと具体→抽象、抽象→具体の「循環

的運動」による方法は「不可能」となってしまうからだ(すると、ロバーツの RD 批判=一方向の「線型的運動」だとする方法は、正しいことになってしまう)。

- 8) バスカーの「科学の三局面」と「実在性のより深いレベル」をふまえて、さらにこの方法をセイヤーが言う「具体→抽象、抽象→具体」と捉える見方に基づくと、三局面における「説明」への展開はどのようなものと考えられるだろうか。A まずは、①の現象の同定と、②の現象への説明の構築の2つの局面には、具体→抽象、抽象→具体の何回かの展開の上で説明が構築され、現象(出来事=経験的ドメイン/現実的ドメイン)の抽象化により隔離された「超事実的な実在的ドメイン」であろう。B さらにこの説明が次には被説明項(バスカーはこの被説明項である超事実的な実在的ドメイン(元の説明)を指して、「次なる説明されるべき『現象』」と言う表現を使っている)となり、新たな「科学の三局面」とやはり具体→抽象、抽象→具体の何回かの展開の上で新たな説明が構築され、新たな「現象(被説明項であるが、出来事=事実的な経験的ドメイン/現実的ドメインなのか、超事実的な実在的ドメインなのかは定かではない)」の「抽象化により隔離された(もしも「現象」が「超事実的な実在的ドメイン」ならばそれも「抽象化」されるのかは定かではない)より「深部の」超事実的な実在的ドメインとなろう。そして本稿では「科学の三局面」そして具体-抽象により構築される「実在的ドメイン」を RD I とし、相対的には構進分析を主とし MMC にも対応しうる方法と考えている。しかしながら、それぞれの抽象化(隔離)作業とは別個のモデルを使用するより「思考」過程により構築される「実在的ドメイン」を RD II として分岐させ、相対的には因果分析(メカニズムの析出)を主とさせているが、こういった因果分析に対応する RD II が MMC にはあるのかが本稿の検討課題の一つであろう。

ただし、さらにはより「下位の階層(stratification)」において RD がなされる場合を、バスカーの“A Realist Theory of Science”では紹介している(主として自然的世界の事例、

Bhaskar 1975, 式部訳 2009, バスカーの今までの引用書では「より深いレベルもしくは層 (strata)」という表現が「より下位の階層」を表すと言われている。この「新たな下位の階層」においてなされる RD も、「超事実的な実在的ドメイン」を析出するのであるが、本稿では社会的世界における科学の方法であるので、階層を超える RD はほとんど考察の対象とはしない。ただし、「自然的世界」ではその「運動」を捉えるのにどこまでも客観的な RD (RD I による「抽象化」) で可能であるかも知れないが、「社会的世界」では「社会の運動=すなわち『(生成) メカニズム』」を捉える (すなわち RD I から RD II を方法論化する) のには「人間 (エージェント)」が「偶然的なもの」による「開放システム」を形成する要素になるが、同時に「人間 (エージェント)」の「意図 (せざる場合を含めて)」が「運動」の重要な「要因」を形成するので「階層論」的視点は必要とはなるだろう。

- 9) バスカーの「科学の三局面」からなる RD I は、おそらくは「マルクスの資本論の方法 (MMC)」にも依拠しているだろうと想像できるが、しかし後に MMC は考察するとしても、この方法で「抽象化」を進めるならば、「商品」あるいは「価値」が分析されてくるだろう。果たしてこの商品などの概念が、「(生成, 因果) メカニズム」(超事実的な実在的ドメイン) であるかと言えば、後半で論議するのであるが、本節で述べているように「構造/関係」としてより上向された概念 (貨幣や商品) を構成するものではあっても (「構造分析」), そのまま「メカニズム」とは同定できない概念であり、次の RD II の方法により「メカニズム」を同定する「因果分析」を必要とすると、私見では考えている。

ただし MMC の「下向-上向 (抽象-具体)」という展開では、「抽象」において必ず、RD という「構造/関係 (RD I の展開)」もしくは「メカニズム (RD II の展開)」(いずれも超事実的な実在的ドメイン) が隔離されるとは限らない。本文中で言えば「出来事」の操作による「抽象化」と、「思考による」抽象化との区別が引用されたが (『説明』 p.69), 前者の隔離からは、多くの場合「出来事

(現実的ドメイン) による操作」(見田の表現では「単純な分析」) によって析出されるのは、具体からの「より抽象化された具体」(すなわちより抽象化された「出来事 (現実的ドメイン)」, 例えば諸資本 (産業資本, 商業資本, 農業資本, 等々) から産業資本が隔離された場合であり、「超事実的な実在的ドメイン」を析出し得ない。さらに、「思考による」抽象であっても、現象である「出来事 (現実的ドメイン)」の構成を「説明」しうる「構造 (さらには関係) (これは実在的ドメインではある)」は析出し得ても、出来事を生成させる「(生成, 因果) メカニズム」の析出は困難であろう (前者が RD I であり後者が RD II, 見田では前者が単純な分析-総合過程, 後者が弁証法的過程)。したがって、バスカーの RD II をとりわけ分離して取り出し、その上で RD と MMC の方法的対比を本稿では試みている。

また RD I と RD II の相違として、「超事実的な実在的ドメイン」という共通性のなかで、一方は「構造分析」他方は「因果分析」と位置させるのは相対的な区分であることはもちろんである。また MMC における見田の「分析的総合」と「弁証法的総合」との区分も、RD I と RD II の相違に位置させているのも同様なことが言えよう。どちらも RD II における「(生成, 因果) メカニズム」と MMC における「歴史的発生過程」「移行の必然性」という視点の両方法の共通性を見ようとするための区分であることは強調しておきたい。

- 10) 開放システム (open system) と閉鎖システム (closed system) については『説明』(前掲書 p.103) 参照。
- 11) 「説明」である「実在的ドメイン」の検証 (経験的テスト) については、抽象-具体の展開という RD I の結果である「構造=実在的ドメイン」であるならば検証は可能性をもつが、RD II の「より深部の」展開の結果である「生成メカニズム」について見れば検証は不可能に近いとされている。「生成メカニズム=因果メカニズム=因果力」をさらに概念的分析をすれば、①「保持された力」、②「行使された力」、③「現実化された力」と3つになるが (フリーウッドによる cf. Brown et al. (eds.) §1-§8 pp.4-5), あえて今までの概念と対

- 比させれば、①は「構造／関係（実在的ドメイン）」に近い概念であり、②はまさに「メカニズム（実在的ドメイン）」そのもの、そして③は「現実的ドメイン」における、メカニズムによる生成の「所産」としての「出来事（経験的ドメインを含む現実的ドメイン）」であろう。したがって、③であるならば、具体化あるいは「経験的テスト」は可能である。また③という「出来事」を「メカニズム」を使用して「説明」し、その「妥当性」を「検証」とすることも可能であろう（ただし、「妥当性」を「科学的な正しさ＝真理」と同質とはできない）。そしてまた①については、既に抽象－具体から「より可能」と判断している。そうすれば、「検証」という問題は②における「行使された力」としての「（生成、因果）メカニズム」という「超事実的な実在的ドメイン」を、如何に「経験的にテスト」するかという問題にしばられ、本稿では「不可能に近い」としているのである。
- 12) 「実在的ドメイン」における「超事実的なもの」を、どう「構築」し、どう検証＝「経験的にテスト」するのかは、RDにとっては研究方法上の難しい課題であろう。「不可能」とするのは『説明』執筆者のカーソンであったが（上記注）、しかし『説明』では例えば、「反事実的志向」、「思考実験」、「病理的状況である極端な事例研究」、「比較事例研究」等の事例からのRDを考案しているが（同書 p.153f.）、「原理的な」方法の提起とは思えない。セイヤーは、具体→抽象、抽象→具体の過程で、ただ因果メカニズム（実在的ドメイン）の「所産」が、「ある瞬間」にのみ「超事実的なもの」が同定可能だとしているのであるが、何故に「可能」なのかについては判然とはしない。現象学的（解釈学的）社会学の「直感的な」抽象や、「实在」を存在論的に認めない社会的構成（構築）主義がピアジェの方法に依拠する「経験的」抽象に対する「反省的」抽象の方法（「実在しないもの」、あるいは「経験できないもの」を抽象化して知覚しうる手法と語られる）が、逆説的なヒントとなるかも知れないが未だ方法論的な課題であろう。
- 13) 研究手段の歴史的な発展が、「深部の」実在的ドメインの解明（RDの進展）に寄与することは認められるのであるが、そのことと「超事実的なものの変化」とはすべて同じではないだろう。
- 14) MMCにおける「非歴史（歴史貫通）的な一般的な抽象概念」と、CR論における「超事実的概念」とが同じであるかはさらなる考察が必要であろうが、両理論において「重りあっている」ことについては認められるのではない。
- 15) 見田は分析的手法を重んじる弁証法論者である。したがって従来の「対立物（例 十と一、北極と南極、男と女）」は「矛盾」ではないので「弁証法」ではなく、分析手法による「分析」と「単純な総合」として捉える。この「単純な総合」とは、RD Iにおける現象の構造分析の所産である、構造／関係の「単純な総合」による構成がなされる過程を、具体→抽象、抽象→具体として見る視点と重なる。また歴史的発生、必然的な移行などは対象における存在論的な運動であり、この運動を捉えうる概念が「弁証法的総合」とされるのだが、これはRD IIの因果分析において「（生成、因果）メカニズム」を捉える視点に重なる方法論的視点だと思われるのである。
- 16) 「階級」で終わるというMMCの展開は、種々の問題を投げ抱えている。当概念はMMCのそれまでの達成点でもあるのであるが、次なる出発点でもある。したがって階級概念は商品と同じ複数の性格をもった概念的位にあるだろう。少なくとも、超事実的な実在的ドメインにおけるメカニズムと重なる概念としてみよう（階級理論をCR論を通して考察したのは、拙稿の木田 2015を参照）。しかし階級概念を据えた途端、人間の存在をどう理論的位置に入れるかという方法論上の課題が出現してくる。商品が資本を前提し、また資本制社会への歴史的発生、必然的移行に繋げると同じ方法論上の要請がかけられてこよう。それは最後に提示のみとした、CR論の人間へのRDの課題であろうし、人間と社会のアーチャーが言う「分析的二元論（政治学学者のジェソップは「弁証法的二元論と言う）」にも係ってこよう。さらには、前半で考察した「階層論」の見方からすれば、「階級」とは「社会的階層」と「人間（エージェント）的（あるいは心理）的階層」との「接点」とも言える概念であり、新たな考察を要するのである。（ただし、「（上位にあたる階層の）社

会」の商品概念から上向した部分に、「下位にあたる階層」である「人間 (エージェント)」が出現するのであるが

- 17) 注16の課題は、狭く見れば「新しい社会学」の課題でもあろう。拙稿では“社会”概念を、MMCの延長で把握しようと検討考察してきたが、ここにCR論やRDで得た知見をいかに組み込むかという段階での、「社会」学」の位置と方法という「新しい」課題が浮上していると言えよう (木田1979/1980, 2005等参照)。

引用文献・参考文献

- Archer, M.S. *“Realist Social Theory: the Morphogenetic Approach”* Cambridge University Press, 1995 (佐藤春吉訳『实在論的社会理論—形態生成論的アプローチ—』青木書店, 2007)
- Archer, M. S. et.al. (eds.) *“Critical Realism: Essential Readings”* Routledge, 1998 (Archer, M. S. Bhaskar, R. Collier, A. Lawson, T. Norrie, T. (eds.) *“Critical Realism: Interventions”* A)
- Bhaskar, R. *“A Realist Theory of Science”* Verso, London, 1975 (Routledge, 2008) (式部信訳『科学と实在論』法政大学出版会, 2009)
- Bhaskar, R. *“The Possibility of Naturalism”* Harvest Press, 1979 (式部信訳『自然主義の可能性—現代社会科学批判—』晃洋書房, 2006)
- Bhaskar, R. *“Dialectic: The Pulse of Freedom”* Routledge, 1993 (式部信訳『弁証法—自由の鼓動—』作品社, 2015)
- Brown, A. Fleetwood, S. and Roberts, J. M. (eds.) *“Critical Realism and Marxism”* Routledge, 2002 (Archer, M. S. et.al. (eds.) *“Critical Realism: Interventions”* B) in this book
- §1 Brown, A. Fleetwood, S. and Roberts, J. M. ‘The marriage of critical realism and Marxism: Happy, unhappy or on the rocks?’ in this chapter
- §§1 Critical Realism: Augmenting Marxism (Fleetwood, S.)
- §§2 Marxism does not require the services of critical realism (Roberts, J.M.)
- §§3 What contemporary Marxism can learn from critical realism (Brown, A.)
- §4 Fleetwood, S. ‘What kind of Theory is Marx’s Labour Theory of Value?: A Critical Realist Inquiry,
- §7 Creaven, S. ‘Materialism, Realism and Dialectics’
- §9 Brown, A. ‘Developing Realistic Philosophy: from Critical Realism to Materialist Dialectics’
- §12 Roberts, J.M. ‘Abstracting Emancipation: two Dialectics on the Trail of Freedom’
- Banaji, J. ‘From the Commodity to Capital: Hegel’s Dialectic in Marx’s Capital’ (Elson, D. (ed.) “Value: The Representation of Labour in Capitalism” CSE Books, 1979
- Creaven, S. *“Marxism and Realism: A Materialistic Application of Realism in the Social Sciences”* Routledge, 2000 (Archer, M. S. et.al. (eds.) *“Routledge Studies in Critical Realism”*)
- Danermark, B. et.al. *“Explaining Society: Critical Realism in the Social Sciences”* Routledge, 1979 (Archer, M. S. et.al. (eds.) *“Critical Realism: Interventions”* A) (佐藤春吉監訳『社会を説明する—批判的实在論による社会科学論—』ナカニシヤ出版, 2015)
- Monthley, F. (ed.) *“Marx’s Method in Capital”* Humanities Press, 1993
- Monthley, F. and Campbell. M. (eds.) *“New Investigations of Marx’s Method”* Humanities Press, 1997
- in this book
- §1 Arthur, C. ‘Against the Logical-Historical Method: Dialectical Derivation versus Linear Logic’
- Sayer, A. *“Method in Social Science: A Realist Approach, 2nd edition”* London: Macmillan, 1994
- Shamsavari, A. *“Dialectics and Social Theory: The Logic of Capital”* Merlin Books, 1991
- 木田融男「“社会”概念をめぐる(上)(下)」『新しい社会学のために』19号/20号, 現代社会研究会, 1979/1980
- 同「“社会”概念と市民社会」『産業社会論集』第41巻

- 第1号，立命館大学産業社会学会，2005
- 同「格差社会と階級理論—批判的実在論を通して—」
櫻井純理他編著『労働社会の変容と格差・排除—
平等と包摂をめざして—』ミネルヴァ書房，2015
- 見田石介『資本論の方法』弘文堂新社，1963
- 見田石介『宇野理論とマルクス主義経済学』青木書店，
1968

Critical Realism and Retroduction : On Comparisons of Social Sciences

KIDA Akioⁱ

Abstract : At first I will introduce an article titled ‘The marriage of critical realism and Marxism: happy, unhappy, or on the rocks?’ (Brown et.al. (eds.) “*Critical Realism and Marxism*” Routledge, 2002) which shows us the relationship between the latest critical realism and Marxism argued over methods in social sciences. In particular, I will study a “discord” on retroduction in critical realism compared with Marx’s method in Capital. Concerning my view of this issue, I agree with retroduction’s effectiveness in critical realism, but disagree with “discords” between both theories. Therefore I would like to make a new proposal that “Marx’s method in Capital is in fact the correct retroduction” and I will prove this by my account.

Keywords : retroduction, real domain, trans-fact, structure, (generative/casual)mechanism, linear movement - circular movement

i Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University